Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-24

周辺資本主義論序説 ： ラテンアメリカにおける資本主義の形成と発展

原田，金一郎

(Degree)
博士（経済学）
(Date of Degree)
1998-12-16
(Date of Publication)
2014-01-27
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
乙2287
(JaLCDOI)
https://doi.org/10.11501/3156437
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2002287

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

[19]

氏名・（本籍）	原田金一郎（はらだきんいちろう）　（兵庫県）
博士の専攻分野の名称	博　士（経済学）
学位記番号	博ろ第118号
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学位授与の日付	平成10年12月16日
学位論文題目	**周辺資本主義論序説** **ーラテンアメリカにおける資本主義の形成と発展ー**
審査委員	主査　教授　西島章次 教授　高橋秀行　　教授　植松忠博

論文内容の要旨

本論文は，16世紀より形成期に入った世界資本主義が，従属的周辺部として包摂したラテンアメリカにおける資本主義の形成過程の分析と，そこから派生する理論的諸問題の考察を目的とする。本論文の分析方法は以下の３点に基づいている。第１は周辺的視座であり，世界資本主義システムが「中心＝周辺」関係を通じて発展したと位置づけ，ラテンアメリカの資本主義の形成過程を分析する。第２は歴史的＝構造的アプローチであり，中心部とは異なる歴史的経験を有する周辺部の資本主義形成過程を分析するには，固有の歴史的・構造的アプローチが必要であるとする。第３は，ラテンアメリカを総体として認識することによって，ラテンアメリカ周辺資本主義論を展開することである。本論文は，第１部「歴史」の４つの章と，第２部「理論」の４つの章から構成されている。

第１部，第１章「ラテンアメリカの経済概史」は，先スペイン期から現在にいたるラテンアメリカの経済史を扱うが，先資本制期（先スペイン期，植民地期，過渡期）と資本制期（一次産品特化期，輸入代替期，現在）に時代区分する。筆者の基本的な歴史認識が提示さる。先スペイン期はアステカ・インカ社会に，植民地期は貢納賦役制と伝統的土地所有制期・プランテーション期に，過渡期は独立革命期に対応させることによって，ラテンアメリカの先資本制期の特質を明示している。ラテンアメリカの資本制期は1870年代に始まり，一次産品特化期，輸入代替期，現在と変化するが，こうした変遷のなかで，ラテンアメリカの資本制が世界資本主義システムに従属的に包摂された周辺的なものとなったことを議論している。

第２章「メキシコにおけるアシエンダの形成」では，アシエンダと呼ばれる伝統的大土地所有制の形成過程の分析を通じて，資本主義への移行過程を検討する。すなわち，アシエンダが，スペインの封建制の影響と先住民組織の共同体とによる複合社会であると認識し，その時代的変遷を解明することによって資本主義の形成過程を議論する。ここでの一つの視点は，アシエンダが，恩貸地（メルセー）を起源とする放牧地と農場とが結合して形成された複合的生産組織であり，また自給部門と商業

部門の二重性をもつ過渡的組織であることに着目することにある。したがって，植民地期メキシコ社会は，封建制から資本主義への移行期に入っていたヨーロッパの商業的拡張主義の影響を受けながら，スペインの封建的法制と先征服社会の基底をなしていた共同体との，過渡的かつラテンアメリカ的な複合社会であると結論づけている。

第3章「キューバ精糖業の資本制的発展」は，キューバにおける資本主義の移行過程を歴史的に分析した章である。生産過程，技術革新，労働形態，鉄道の導入，土地制度，生産関係，対外関係などの分析を通じて，キューバの精糖業を手工業段階，流通過程の拡大を特徴とする量的拡大期，生産過程における技術革新を特徴とする質的発展期，サトウキビ専用鉄道の導入期，奴隷開放と賃労働化期，コロノと呼ばれるサトウキビ専業農民発生期と，いくつかの歴史的段階に区分し，サトウキビ専用鉄道の導入以後のセントラル期と呼ばれる時期に，対米従属的な資本制発展段階に達したことを論証している。

第4章「ペルーにおける共同体と社会主義」は，資本制への移行過程において，先住民組織・共同体が深く関わること，自立的経済発展が従属的構造によって歪められることを，ペルーの思想家マリアテギの著作を通じて議論した章である。マリアテギは，ペルーはメキシコとならんで先住民が稠密で，共同体も広く存在しており，この先住民の解放なくしては国の発展はありえないとするインディヘニスモ（先住民復権思想）を唱え，こうした思想に立脚し，ペルーの自立的発展と先住民大衆の解放のためには，社会主義が必要であるとした。筆者は，マリアテギの特異性が，周辺的視座によるマルクス主義の普遍化の試みであったと捉えている。なお，筆者はマリアテギの議論について我が国唯一の紹介者である。

第2部，第5章「ラテンアメリカの従属論争総括」は，フランクに代表される従属論をめぐる論争の総括と展望を試みた章である。フランクに対する評価点として，両極的発展論，通時的帝国主義論，余剰収奪史観をあげ，批判点として，民族・国家・国民経済概念の欠落，流通論に過ぎないこと，外因決定論であることとしている。こうした従属論の主張点と批判点を整理した後，今後の周辺資本主義研究への展望として，世界資本主義論，不等価交換論，節合論への可能性を論じている。世界資本主義論においてはウオラーステインの世界システム論，不等価交換論についてはエマニュエルの議論，節合論についてはフランスの経済人類学による議論などを，今後の展開方向として重要であると位置づけている。

第6章「中米共同市場の理念と現実」は，中米共同市場の経験を検討することにより，周辺部諸国が従属から脱出するための，集団的自力依存論を展開した章である。中米共同市場は，国連ラテンアメリカ経済委員会の理論的な指導の下に，自由貿易と自由市場を目指して形成されたが，現実的帰結は当所の理念とはかけ離れた経済成果しか生みださなかったとする。このため，経済統合の旧来の理論に代替すべき理論として集団的自力依存論を提唱している。すなわち，周辺部諸国は，互いの自力的発展にとって必要な原料・技術を交換するという相互援助の枠組みである。さらに，共同行為によって国際分業上の公平性を確保することが必要であるとしている。また，自然資源の民族的管理などの戦略も議論している。

第７章「ニクラグアの混合経済論争」は，既存の社会主義にとって変わるべき代替的な社会主義を模索してなされた論争の紹介である。国家主義派，自由市場派，混合経済派，の３つの立場のうち，とくにニカラグアで実践されようとしていた第３の立場の民主的社会主義モデルを議論している。その特徴は，生産手段所有の法的形態の複合性，権力の分散を可能とする経済構造，発展・所得分配および権力の分散，拡大再生産に便宜を図る経済政策，労働者の効果的な参加であり，より一般的には経済活動の民主化と呼べる形態である。

第８章「新移行論争再論」では，封建制から資本主義への新たな移行論争について議論している。新移行論争はフランク＝ラクラウ論争として着目を集めたが，こうした議論に貢献したメキシコの歴史家セーモの議論に批判的検討を加えたものである。まず，セーモの議論の貢献を，16世紀以降のラテンアメリカを過渡期として捉え，植民地期メキシコの社会構造を複合特殊社会であると規定したことにあるとする。しかし，セーモ所説の問題点として，資本主義と資本または資本家とを混同している点，世界市場との関係に於いては資本制的であるが内部構造において資本制的ではないプランテーションの生産システムを資本主義と呼ぶことの矛盾などを議論している。

論文審査の結果の要旨

本論文全体としての貢献は，我が国のラテンアメリカ研究において，ラテンアメリカの経済発展に関する歴史的研究が極めて少ないという状況の中で，「周辺」という立場からの初めての本格的な研究であることである。個別的には，以下の３点を指摘することができる。

第１は，ラテンアメリカを周辺部として捉え，世界経済との関わりのなかでの資本制への形成と発展過程を，筆者独自の歴史区分認識によって体系的に検討したことである。とくに，複合社会という資本制移行期に特徴的にみられる概念に着目し，メキシコの資本主義の形成過程の特質を明らかとしたことが評価される。

第２は，ペルーの思想家マリアテギの思想について，我が国で初めての思想史的紹介をおこない，同時に，マリアテギのインディヘニスモ思想に基づく共同体と社会主義の議論を，周辺的視座によるマルクス主義の普遍化の試みであると位置づけたことである。

第３は，ラテンアメリカで生成，発展した従属理論にまつわる論争を包括的に整理・体系化していることである。また，以上の従属論争の検討を踏まえ，ラテンアメリカの資本主義の形成と発展を説明する新たな展開方向として，世界資本主義論，不等価交換論，節合論への連関を明確とした点があげられる。

本論文にさらに望まれるのは以下の点である。

第１に，第１部は歴史的研究とされるが，むしろ思想史，学説史に近い。本来，歴史的研究とは，第一次資料・原資料を丹念に渉猟し，歴史的事実の認識とそれに基づく分析が要求される。今後は，現地ので資料収集に基づく，議論の補強が望まれる。

第２は，今後のラテンアメリカの資本主義の形成と発展を説明する周辺資本主義論として，節合論の立場を重視しているが，その論理展開は不十分であり，筆者が主張する周辺的資本主義論の現代的意義をも含めて，今後いっそうの発展が望まれる。

しかし，これらの課題は，本論文提出者の今後の研究に待つべきものであり，本論文自体の意義と貢献をなんら損なうものではない。以上のことを総合して，審査委員は一致して，本論文の提出者が博士（経済学）の学位を与えられるに十分な資格を持つものと判断する。